

〈事例報告〉

学生の地域連携活動と今後の課題 — 食で地域の多世代をつなぐ「えんがわ家族食堂」 —

星 玲奈、廣重 剛史

(社会学部社会情報学科)

Student Community Collaboration Activities and Future Challenges : Connecting Multiple Generations in the Local Community Through Food with the “Engawa Community Kitchen”

Rena HOSHI, Takeshi HIROSHIGE

(Department of Social Information, Faculty of Studies on Contemporary Society)

2019年度に目白大学の学生が、新宿区戸山地区の地域住民の方と共に食を通じた地域連携活動を実施した。食を通じて地域の様々な世代の方と交流する「えんがわ家族」の食堂事業に参画するなかで、学生の社会的課題への認識や、地域コミュニティ活性化の重要性についての意識の向上が見られた。本稿ではその実践した取り組みについて報告する。

キーワード：地域連携活動、多世代交流、共食、食育活動、地域コミュニティ再生

はじめに

近年、様々な大学が大学独自の特色や専門性を生かし、地域や近隣に住んでいる子どもを対象とした「子ども食堂」等の地域連携活動を実施している。しかし多くの地域連携活動は、対象者を児童か高齢者に限定している事例が多く、食を通じた多世代交流を実施している報告は少ない。平成17年に制定された食育基本法の基本的な方針や目標について、平成28年度から展開されている第3次食育推進基本計画では、「多様な暮らしに対応した食育の推進」を重点課題とし、地域等で共食したいと思う人が共食する割合を、平成27年度の64.6%から平成32年度までに70%以上とすることを目指している。

現在、日本では高齢者の孤食問題や、貧困による子どもの食環境問題など、食に関する様々な課題があるが、これらの食に関する問題は、多世代交流をすることで双方のニーズが満たされ、個人の課題解

決の一助になる。例えば、児童において自分が作ったものを食べるだけでなく、誰かに食べてもらうことによって自尊心や自己肯定感が向上することが先行研究で示されている。そのため共働き家庭や家庭の諸事情により、普段家庭で調理を行っていない子どもに調理を行う機会を与えることは、経験値だけでなく、生きる力を育む技術を身に付けさせられる。その上、地域の方々から料理を教えてもらうことにより、地域の中で顔見知りが増え、子どもにとっての防犯・安全上の大きなメリットになる可能性がある。

一方高齢者では、高齢者の社会貢献活動への意識調査において「社会の一員として何か社会のために役に立ちたいと思っている」と回答した割合は、2018年の調査で男性の60歳代が69.1%、70歳代では57.2%、女性の60歳代が67.7%、70歳以上では52.5%と意識が高いことがうかがえる。また、令和元年の「高齢社会対策の大綱について」のなかで

は、「意欲ある高齢者の能力発揮を可能にする社会環境を整えること」が述べられている。農林水産省「食育に対する意識調査」の報告書によると、「地域等での共食に参加したいか」という設問に対し、70歳以上の男女共に「とてもそう思う」「そう思う」と回答している割合も高いことが示されている。これらのことから、学生が両者の架け橋という役割を担い、多世代交流を行うことによって、地域に大きな利益をもたらすかもしれない。

そこで今回、新宿区戸山地区で地域食堂を運営している任意団体「えんがわ家族」と連携させていただき、学生が地域住民と共に活動に参加することで地域との関係づくりに取り組む、食を通じた多世代交流活動を実施した。本活動の大きなテーマは、学生が地域住民の方と協力しながら子どもたちと共に調理を行うことで、①子どもが調理の面白さを実感できるようにすること、②地域住民の方々が楽しく会食しながら多世代交流できること、とした。

1. 2019年の地域食堂の目的と活動内容

「えんがわ家族」は、新宿区の戸山ハイツに居住している代表の渡辺萌絵氏が2018年に設立した団体であり、活動の目的は、「地域の多様な人々がゆるやかに繋がり、お互いが共に支え合える温かいまちづくりを目指し、多世代交流や子育て支援、高齢者支援を軸に、食の交流会など様々なイベントを展開し、地域のコミュニティ再生に取り組む団体」である。新宿区の戸山ハイツは65歳以上の高齢化率が6割にもなる都営のマンモス団地であり、“都心の限界集落”とも呼ばれ、多くの社会的課題を抱えている。その戸山ハイツにおいて、学生が主体となって当該地域の社会的課題を検討するとともに、新宿区立戸山シニア活動館での多世代交流を目的とした地域食堂を計画、実施した。その実施内容を表1

に示す。2019年は1年間に4回の地域連携活動を予定していたが、2020年3月に実施予定であった第4回目は、新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、中止となった。

次にこれらの毎回のイベント内容をどのように検討したかを示す。えんがわ家族と本学との社会連携に関する事項は、「新宿まちづくりネットワーク懇談会」の開催の中で決定された。この懇談会の目的は、新宿区に所属する様々な組織が集まり、新宿区の地域交流等の在り方を検討することである。この「新宿まちづくりネットワーク懇談会」の会議は月に1回早稲田付近で実施されており、多様な分野で活躍されている地域の方がご出席されている。そこで学生には、懇談会に参加させていただき地域の社会的課題やイベント内容などに関して、地域の方のご意見を伺うことができる機会を設けた。

2. 学生ボランティアの募集について

第1回目の学生ボランティアは、ボランティアサークル「三陸つばき」の学生及び社会情報学科の学生が参加した。また、第1回目の学生の募集方法として、講義時及び講義終了時にイベントの開催を伝え、学生ボランティアを募集した。第2回目、第3回目は共に本活動に興味を持った学生及び次年度廣重・星ゼミナールに所属希望のある学生が参加した。それぞれの学生のボランティア参加者は第1回目が6名、第2回目、第3回目共に12名であった。

3. 学生ボランティアと役割分担

学生の役割として、①会場設営及び運営、②調理指示、③食育クイズ等の催し物の運営の3つを設置した。学生のイベント実施における活動状況を表2に示す。毎回のイベントごとに実施前に打合せを、実施後には反省会を実施した。事前の打合せの際に

表1 えんがわ家族食堂 開催日及び献立内容

回数	開催日時	時間帯	献立内容	参加人数 [§]
第1回	2019年 7月11日(木)	16時30～19時30分	おにぎり、卵焼き、煮びたし、豚汁	67名
第2回	2019年 9月26日(木)	16時30～19時30分	カレーライス、サラダ、フルーツポンチ	80名
第3回	2019年12月22日(日)	11時～14時30分	飾り巻き寿司、鶏ハム、雑煮、さつまいもきんとん	53名
第4回	2020年 3月 1日(日) ^{**}	13時～15時30分	スコーン、アフタヌーンティー	50名(予定)

^{**}新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止

[§] ボランティアスタッフ含む

表2 学生の活動状況一覧

開催日時	事前・事後打合せ	打合せ内容
第1回 2019年7月11日(木)	(打合せ) 2019年6月6日(木)	食育クイズ実施内容検討
	(反省会) 2019年7月11日(木)	当日の工程について反省会
第2回 2019年9月26日(木)	(打合せ) 2019年9月5日(木)	イベント実施内容検討(1)
	(打合せ) 2019年9月19日(木)	戸山団地視察・イベント実施内容検討(2)
	(反省会) 2019年9月26日(木)	当日の工程について反省会
第3回 2019年12月22日(日)	(打合せ) 2019年11月28日(木)	イベント実施内容検討(1)
	(打合せ) 2019年12月12日(木)	戸山団地視察・イベント実施内容検討(2)
	(反省会) 2019年12月22日(日)	当日の工程について反省会
第4回 2020年3月1日(日)*	2020年3月1日(日)*	

※新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止

表3 えんがわ家族食堂参加者内訳

	開催回	第1回	第2回	第3回
一般参加者	参加人数	67名	80名	57名
	大人(保護者)	14名	11名	15名
	子ども(幼児~中学生)	17名	20名	12名
	その他地域住民	11名	22名	
	シニアボランティア	7名	8名	14名
	本学学生	6名	12名	12名
	その他関係者 [§]	14名	7名	4名

§ 見学者含む(近隣小学校校長、区職員、社会福祉協議会、パルシステム関係者等)

は、当日の工程の打合せと、食育クイズ等の催し物の検討を中心に行った。特に調理業務等に不慣れな学生もいたため、学生の疑問及び戸惑っている部分を解決するために、随時教員に相談できるような体制作りも行った。また学生には、戸山地域にどのような社会的課題があるのかを事前に説明し、実際に戸山ハイツを視察するなどして、地域が抱える社会的課題についても学習した。

4. 対象者及び対象者の募集方法

対象者は、地域の子ども・保護者、戸山ハイツ内の高齢者が参加できるようにした。学生に対する活動のねらいは、学生が地域住民の方と連携しイベントを行うことで、学生のボランティア精神やリーダーシップ、社会的課題への実践的な理解向上などに重点を置いた。

会場はすべて戸山ハイツ内にある戸山シニア活動館で開催した。参加者は新宿区内及びその周辺に居住する親子とその地域住民を対象とし、区報やチラシ、SNSにより参加者を募集した。第2回目の実施の際には近隣の公立小学校の協力を得て、全学年

に対してチラシ配布の協力を得た。また、同時期に会場の戸山シニア活動館にも、案内文書を掲示・配布を行った。またその際、本事業では食物アレルギーに対する対応をしないことを併せて周知し、ケガや病気に対しては社会福祉協議会の団体任意保険に加入することで対応することとした。参加する子どもたちや保護者からは地域食堂参加の際に、保護者の電話、住所などの連絡先を明記することとした。

最終的にそれぞれ家族食堂の参加者は親子、地域住民、地域のシニアボランティア、学生のボランティアを含めて第1回目が67名、第2回目が80名、第3回目が53名となった。参加者内訳を表3に示す。

5. 地域食堂開催の概要について

地域食堂にて実施した実施内容と学生の様子を、以下に示す。

(1) 第1回目

第1回目のテーマは、子どもが主として調理を行う「子どもシェフキッチン」で、献立はおにぎり、卵焼き、煮びたし、豚汁であった。事前に学生には自宅で切りものや卵焼きなどを繰り返し試作するように伝え、実際当日には、学生が子どもたちとマンツーマンとなって、共に地域のシニアボランティアや地域住民の方から調理指導を受けた。またシニアボランティアの方々から、子ども達と学生に野菜の切り方や卵焼きの作り方などのサポートを頂き、出来上がった料理を皆で分かち合う事で、食を通じて普段ほとんど接点の無い地域住民同士の交流を深めることができた。食後には学生による食育クイズ大会を行った。内容はクイズで各テーブルが自然に交

流できるような空気を作ること、幼児でも理解しやすい内容にすることなどを検討材料とし、それぞれ各学生が用意してきたクイズを行い、食育の知識提供にも努めた。その後参加者全員で記念撮影をした後、子どもたちと後片付けを行って解散となった。(図1、図2)



図1 全体の集合写真

てどこに課題があったかなどの自発的な話し合いが行われていた。この反省会は教員が促すことなく、学生が自分で反省点や課題を考え、次のPDCAに繋がるようにするにはどうしたらよいかを活発に議論している姿を見受けることができた。(図3)



図3 学生による食育講話



図2 学生が地域住民と共に子どもに調理指導を行っている様子

(2) 第2回目

第2回目の地域食堂も前回と同様に「子どもシェフキッチン」というテーマで、2歳～小学4年生までの子ども達と共に、カレーライス、サラダ、フルーツポンチの調理を行った。調理は参加者の年齢に応じて役割分担をし、地域のシニアボランティアや学生達が共に協力しながら実施した。会食後は、学生による食育クイズと、「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶についての講話の後、参加者全員で「ごちそうさま」を行った。最後は記念撮影を行い、全員で後片付けをして解散となった。学生たちは積極的かつ臨機応変に動こうとする様子が見られ、イベントの終了後の反省会では、今回学生の動きにおい

(3) 第3回目

第3回目は難易度を少し上げ、様々な祝事で応用することができる「飾り巻きずし」と、正月料理になぞらえて「さつまいものきんとん」を子ども達と共に調理した。「飾り巻きずし」は巻き方にコツがあり、長時間の集中力を要するため、必要な材料は全て運営側で準備し、子ども達には飾り巻きずしに専念してもらうような環境を整えて行った。「さつまいものきんとん」も同様に、さつまいもをあらかじめふかしてマッシュしておき、丸めて飾り付けができる段階まで下準備を行った。地域のシニアボランティアや地元小学校のPTAの方にサポートに入ってもらいながら、一人2本の飾り巻きを作ることができた。また、年齢の低い子どもたちはマッシュしたさつまいもを丸めて焼き、そこにチョコレート等でデコレーションを行って仕上げをした。学生はそれぞれの持ち場について、地域のシニアボランティアより飾り巻きずしの調理指導を受け、子ども達と共に調理を楽しんだ。第3回目の食卓にはその他に、地域のシニアボランティアの方が作ってくださった「東京風雑煮」と「なます」が、また参加されていた保護者の方が作ってくださった鶏ハムが並んだ。(図4)



図4 出来上がったお正月献立

この時に第3回目として大きく地域交流があった点は、「雑煮」や「なます」「鶏ハム」を調理された方が全体に向けてどのようなコンセプトで本料理を作ったか等の説明を行い、その後、各テーブル内でのように作ったのかという話や、それぞれの参加者の地元の雑煮について自然と意見交換があったことである。これまでの家族食堂では、子どもと共にほとんどの料理を全員で作っていたこともあり、調理工程の苦労話を子どもたちに語り掛けるなどの交流はあったが、自発的に交流するという点に対し、大きな課題があった。しかし第3回目の献立を立案する際に、それぞれ役割を分担したことにより、地域住民の間でレシピを共有するなどの自発的な交流が見られた。(図5)



図5 地域住民と学生、参加者が共に調理を行っている

また、毎回会食の際にはコーディネーターとして学生を配置していたが、テーブルによっては話が続き交流が上手くいかないこともあった。しかしその点において第3回目は、自分の地元の雑煮についてそれぞれが説明を相互に行うなど、学生と地域住

民の方とも積極的な交流がみられるというメリットがあった。会食後は地域住民による催し物が行われ、男子学生2名も運営側に回り、会場を盛り上げた。これにより、会食から風物詩の催し物というイベントを、参加者全員で共有することができた。(図6)



図6 学生が地域住民と催し物で会場を盛り上げた

6. 地域連携活動実施後のアンケート結果及び今後の課題

全てのイベント終了後すぐに、学生へ自由記述式の質問紙調査を実施した。学生の感想には地域交流に関し、「いろんな世代が楽しめるようになってよかった」や「まとまりがあった進み方をしていたので参加しやすかった」「作ったことのない飾巻き寿司を地域の人や小さい子と作れたのが、楽しかった」「子ども達だけでなく、ご高齢の方々も楽しそうにしていた。他文化(お雑煮や旧正月など)について知る機会があった」などの意見が多く見受けられた。一方で反省点として、「子ども、ボランティアの方、保護者の方、スタッフが固まりがちだったので、さらに散らばってお話ができるとコミュニティが繋がっていくのではないかと感じた」「料理する時間が結構かかってしまっていた」などの意見も見受けられた。

これらの学生の感想とは別に、参加者にもイベント参加の満足度調査を行った。調査の結果、バラツキはあるものの「大変満足」「満足」と回答している参加者が大多数を占めた。またこれらの質問紙の末尾に自由記述欄を設け、感想等の記載を依頼した。記載のあった参加者の感想の一部を紹介する。ポジティブな意見としては、「なかなか経験できないことができて良かった。色々な年代の方と交流できた

のも良かった」「地域の方との交流がすごくよかった」「みんなでカレーライスを作って食べるということが貴重な体験に感じた」「同じ号棟の方と同じテーブルでした。ご挨拶だけの繋がりでしたが、本日この機会に沢山お話が出来たことがとても嬉しかった」という子どもから高齢者までの多くの世代が関わりあえたことに対し、当初の目的である多世代交流における成果を得ることができた。一方で「学生さんがグループ活動など段取りを理解して先導してくれたらよりスムーズだったかなと思います」や「段取りが悪く、子どもがだれてしまう時間が多かった。学生さん達も段取りを把握しておらず指示待ちのために、何もしていない人も多く子どもに指示指導が無かった。もっと責任感と主体性をもって取り組んで欲しい。地域の方々が喜んでいらっしたのは良かったと思う」という今後の課題となる意見もいただくことができた。

以上の意見も含め、今回の地域連携活動を実施した課題について述べる。まず第1に、学生の参加が断続的になってしまったことである。毎回の地域連携活動に継続して参加できる学生が少なく、1回のみ参加しかできなかった学生も多くいた。毎回の地域連携活動に継続して参加していた学生は、地域住民の方とも顔見知りになっていくため、地域住民の方との交流活動が順調に進んでいた。しかし初めて参加する学生は、継続して参加している学生と比べて、イベントの場に慣れるまでに時間を要した。今後は、継続した参加を促進できるような組織体制作りを行う必要がある。

第2に、学生と教員とで打ち合わせを密に行う時間が足りなかったことである。そのため学生はイベント中に、臨機応変に対応することに対し戸惑うことが多く、それが参加していた地域住民の方から見て、主体性に欠ける行動と判断された要因であった可能性がある。どうしても地域との継続的なイベントは、イベントとイベントの期間が短く、教員と参加する全ての学生との時間を調整して打合せを行うことが難しい。今後は情報ツールを変更し、情報共有を円滑にできるシステムを導入するなどの検討が必要である。

第3に調理に慣れていない学生が多くいたことである。これらの食を通じた地域交流活動は、栄養士

養成校などの専門性の高い大学で実施されていることが多い。今後は、調理に慣れていない学生に対し、事前に食に関する基本的な知識や衛生管理に対しての勉強会等を行うことにより、これらの課題をクリアできる可能性がある。

おわりに

本稿では、学生が地域住民と共に食を通じた多世代交流を実施した事例について報告した。学生は地域連携活動を通じて、その地域の社会的課題を講義等で聞くだけでなく、実際に自分の目で見る・地域の方からお話を伺うという体験を経ることによって、改めてそれらの地域の課題を「自分ごと」として捉えようとするなどの意識の向上が見られた。特に「同じ釜の飯を食う」という諺にあるように、同じ食卓を囲むだけでも共食における多世代交流の意義は大きい。このような活動を経ることで、学生が地域の社会的課題について考える機会を得られることは、学生の今後の教育の向上に繋がる可能性が期待できる。新型コロナウイルス感染症の影響で、新しい生活様式が推進されているが、今後は上記に挙げた課題を一つ一つクリアし、学生と地域住民の方と、よりよい食を通じた地域連携活動の在り方を探索していきたい。

《参考文献》

- 中央教育審議会（2005）「我が国の高等教育の将来像（答申）」、文部科学省 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/attach/1347032.html（2020年10月31日アクセス）
- 裴孝承，石橋亜矢，ヴィラーグ・ヴィクトル，中村龍文，徳吉剛，栗原邦夫（2019）。「長崎国際大学子ども食堂における学生主体の取り組みと今後の課題」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』（2），79-90.
- 松岡是伸（2017）。「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所作りの実践—地域における各機関・団体の連携とスティグマの払拭を願って—」『名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター』1（35），109-124.
- 内閣府（2014）「高齢者の地域社会への参加に関する

- る意識調査結果報告書」<https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/index.html>
(2020年10月31日アクセス)
- 内閣府(2019)「令和元年版 高齢社会白書」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s2_1_3.html (2020年10月31日アクセス)
- 農林水産省(2015)「第3次食育推進基本計画」.
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kannrennhou.html> (2020年10月25日アクセス)
- 農林水産省(2020)「食育に関する意識調査」https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki/r02/pdf/houkoku_2_3.pdf (2020年10月31日アクセス)
- 鈴木洋子(2015)「実践力を育む家庭科における食の学び」『日本家政学会誌』, 66(4), 174-178.
(受付日:2020年11月4日、受理日2020年12月9日)